

「銭湯」を用いた地域コミュニティ再編の提案

Proposal for reorganization of local communities using "sento"

○小林陽太¹, 佐藤駿介², 石黒花梨², 梅原久美子², 永野千紘², 佐藤信治³

* Yota Kobayashi¹, Shunsuke Sato², Karin Ishiguro², Kumiko Umehara², Chihiro Nagano², Shinji Sato³

1.はじめに

現在,日本では社会問題が数多く存在する.空き家問題,過疎化,孤独死,過剰なプライバシー意識などあらゆる問題が挙げられる.これらの問題は特に地方で深刻化しており,我が国はこれからこれらの問題に向き合っていかなければならない.

これらの問題は主に人口減少や地域コミュニティの希薄化によって引き起こされると言えるだろう.今となってはインターネットを始めとした技術の発展など取って代わられてしまったが,かつては地縁社会のコミュニティセンター的役割を果たす空間は多かった.その一つに「銭湯」が挙げられる.

銭湯は単に共同浴場といった機能を有しているだけの施設ではなかった.ほとんどの人が毎日銭湯を利用し,人と人との関係性が構築される場でもあった.

現代における現実での人間関係・近隣住人との関係性は薄く,地方のコミュニティでさえも衰弱しつつあるのが現状である.銭湯のような地域に寄り添った施設は今一度再考されるべきだと言える.

しかし,銭湯はこの時代において年々減少している.

全国の公衆浴場数の推移

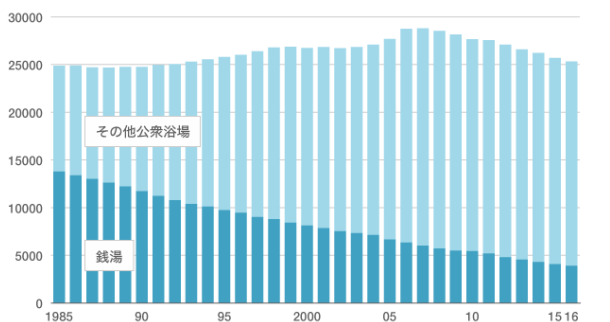


図1.公衆浴場数の推移

理由は主に3つある.1つ目は家庭内の浴槽の普及である.現代の銭湯を考えていく上では,家庭用浴槽との差別化を行い,現代の人々にとっても毎日使いたくなる銭湯を目指さなければならない.2つ目は,後継者の減少である.銭湯は基本的に親族による跡継ぎによって成り立ってきたが,時代柄跡を継ぐ人も少なくな

り,廃業になるケースが多い.再興する上では運営の形態も若い人がビジネスとして参加できる仕組みが望ましい.3つ目にスーパー銭湯などのライバルの台頭である.スーパー銭湯は民衆に好まれているが,日常的に利用されるものではないという点,質の高い設備や多くの湯の種類を目的に訪れる客がほとんどであるという点はコミュニティに問題があると現代の都市空間の延長であるとも言える.銭湯がかつて持っていたコミュニティ形成機能を担えてはいない.

私はこの様な現状に対して,銭湯の魅力を用いて,銭湯の身近さを認識させることが自然な地域コミュニティの形成の手助けになり得ると考えている.無論,現状利用者や施設数が減りつつある今の銭湯は見直すことが必要不可欠である.本提案ではこれからの時代にあった銭湯のあり方を提示する.

2.基本方針

現状の銭湯は現代に適応しているとは言いづらい.銭湯の魅力や,それに伴うコミュニティ形成力を残したまま銭湯という概念をアップデートしていく必要がある.

銭湯というものを町に溶け込ませるために,銭湯のスケールを再設定し,まずは町の1区域を銭湯として捉え,計画を考えていく.一施設から地域に視点を広げた場合,個人個人が銭湯との距離が縮まる(銭湯が生活の一部となる)だけでなく,様々な「財産」を見ることができる.

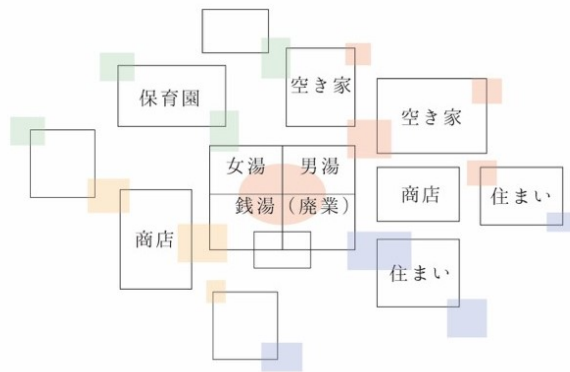


図2.銭湯を地域単位で考える

1 : 日大理工・院 (前)・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, CST., Nihon-U.

2 : 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, CST., Nihon-U.

3 : 日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, CST., Nihon-U.

3.計画背景

3.1 加速する空き家問題

2015年5月に空家等対策特別措置法が施行されてから、「空き家問題」は多くの人に認知されるようになった。「空き家は地域の景観や安全を損なうものである」という負のイメージが多い。事実ではあるが、空き家を巡る問題のほとんどは、所有者自身も、空き家の管理や活用について問題を抱えていることが多々ある。そして、所有者が抱える問題の多くは、法律や税制、もしくは物理的な問題であることが多いため、簡単に解決することができない。このような背景から、空き家は年々増えている。

図1 総住宅数、空き家数および空き家率の実績と予測結果



図3.空き家数の推移

3.2 孤独死にみる現代コミュニティの衰弱

長期に渡り世界の最長寿国としての地位を保っている我が国は、人口構成の変化も進んでいる。少子化傾向と相まって、日本の65歳以上人口割合は23.1%と、およそ4人に1人が高齢者という社会が実現した。高齢化が、医療技術の進歩や安全性の向上の成果であることは疑いない。しかし一方で、高齢化の進行は、我々をさまざまな問題に直面させることにもなった。その一つとして近年注目されているのが孤独死である。都市部の団地や地方の市町村部などにおいて、孤独死が発生している。このような背景からも地域全体で老人を含んだコミュニティを形成することは我が国においても急務であると言える。

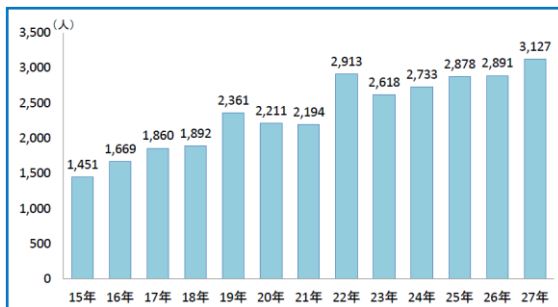


図4.孤独死の増加

4.基本計画

前項からもわかるよう空き家を主に活用した銭湯というのは需要があるのがわかる。低価格で風呂に入るといのは貧困問題とも相性がよく、コミュニティ形成能力も高い。しかし、昔ながらの銭湯を訪れることのない現代人にとっては、銭湯特有の地域コミュニティを直に体験する機会自体がないと言っても過言ではない。

そこで私は、一施設スケールに過ぎなかった銭湯というものの概念の拡張をもとに以下を計画する。

4.1 本提案の機能・計画

- (1)公衆浴場機能(2)コミュニティ生成機能(3)景観の保全(4)銭湯文化の再生(5)「個」時代にあった銭湯機能(6)地域性を取り入れた場(7)空き家のコンバージョン

4.2 敷地選定

以上の機能・計画に必要な選定条件を以下に示す。

- (1)高齢者が多く、孤独死などの社会的問題が見られること
- (2)空き家問題が顕著であること
- (3)過疎化が進んでいること
- (4)元々銭湯がある地域

5.建築計画

以上により提案を行う。

敷地は先に述べた敷地条件により日本の社会問題の先進地域とも言える秋田を選定。その中でも、衰退し、現在は廃業になってしまった銭湯、秋田県鹿角市の花の湯の存在した地域を計画対象とする。



図5.計画対象

死んでしまった銭湯文化と死にゆく地域を生き返らせるのが本提案の趣旨である。過疎化の象徴である空き家を中心とし、地域を「銭湯」にコンバージョンしていくことにより、新しい町のあり方が提示できると考えている。

参考文献

- [1]http://www.akitakeizai.or.jp/journal/20141101_topics.html
- [2]https://www.jstage.jst.go.jp/article/jph/58/11/58_959/_pdf
- [3]<https://www.nippon.com/ja/features/h00193/>